

自然へのかかわり方の見直しは創造主に対する責任

——エコロジカルな靈性を目指し

二〇一五年五月二十四日、現教皇フランシスコが回勅『ラウダート・シ』をお出しになって、はや二年。

環境問題への真摯な取り組みは創造主から責任を問われる信仰上の課題であるとの教皇の確信は、信仰者、無信仰者を問わず、環境問題と格闘する多くの人々に歓迎されました。その半年後の十一月三十日から十二月十三日までパリで開催された気候変動枠組条約第二十一回締約国会議（COP21）において、参加国皆が例外なく何らかの責任を具体的な形で果たすと約束し、世界は連帯の喜びに沸きました。同回勅が、「パリ協定」に至る困難な交渉プロセスの後押しの一端となったと言っても大袈裟ではないでしょう。

環境問題にしっかりと向き合い、その軽減や解消のために働き続ける人々の間で醸成されつつある誠実な現実認識や粘り強い実践努力の中に、教皇は〈創造の御業たる被造界に刻み込まれた慈しみの神の福音〉への開きを見ておられるように思われます。

「限りある天然資源」は「皆で」譲り合い〈まずもって貧しい人々と〉分かち合うべきものであり、その「皆」は「将来の子孫たち」を遠く〈終わりの時まで〉射程に収めたものでなければならず、その「子孫たち」の〈人間の尊厳にふさわしい生の質〉は生息環境を共にする「あらゆる生き物」の「然るべき共生の持続的保全」なしにはあり得ません。この真実を正直に認めそこに含まれる責任を潔く受諾しつつ〈ともに暮らす地球を大切に〉する人々の輪に、いのちの絆を強める奉仕の心を携えて、加わるよう、わたしたち信仰者は呼ばれます。

〈無関心のグローバリゼーション〉に抗う〈ケアの文化〉を育みうる〈新しいライフスタイル〉を確立していくための〈率直で透明な対話〉の席に今すぐ着こうとすべての人の背中を押す教皇は、〈健やかな謙遜〉や〈喜ばしい節欲〉を目に見える形で生きさせてくれる知恵と力の泉たる〈エコロジカルな靈性〉と、その泉から飲ませる〈エコロジカルな教育〉の重要性を語られます。

（瀬本正之 まことゆき イエズス会司祭）